慈光

第二十九巻　第五号

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十二年五月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三三五号）

目次

人生問題と信仰……近角常観……(1)
信仰体験録……安波勲八……(7)
「法悦抄」聞光願生……清水凡禿……(10)
一道会の記……榊原徳草……(13)
念仏詩抄……木村無相……(19)
「御一代聞書」私解……花田正夫……(22)

人生問題と信仰

(一)

近角常観

信仰上の話は吾々の心の上において絶対にこれを認める体験であって決して机上の理屈ではない、で今日は他力信仰の根本義についてお話する。

さて人生問題とはどんなことであるか。範囲はすこぶる広くなってくるが、要するに吾々がこの世の中に生れ出て死ぬまでに起きてきたありとあらゆる問題は皆人生問題である。それを種類分けしたら雑多であるが、その中最も吾々に深く感ずるのは職業上の問題、生活上の問題である。釈尊の仏教をおはじめになったのも哲学や倫理学の上での高尚な学問上の立場からされたのではなくて、その発心された動機は生老病死のために、この世の中に悶え苦しんでいる多くの憐れな人々を如何にしても此渦中から救い出してやりたいという、ごく卑近な人生問題に触れて修業されたのである。近年東京における青年の間にもさかんに信仰心が萌えてきたが、これは全く青年の生活が真面目になってきたからである、でこの信仰と云うものは自己と他人との関係において第一歩を開くのである。

聖徳太子はその憲法の第一に「和を以て貴しと為さ忤うこと無きを宗とす、人皆党（たむろ）あり、亦達（さと）れる者すくなし。是を以て或は君父に順ぜず、たちまち隣里にたがう。然れども上和ぎ下睦びて事を論ずるにかなう時は、則ち事理おのずから通じて何事か成らざらん」と云われてある通り、吾々人間社会には和という事は最も大切なことであるが、吾々に真の和を保って行っているかどうか、ここが即ち疑問の生じてくるところである。今吾々が一寸考えて見ると、家庭間でも友人間でも、真実にへだてのない理想的の交りをして居ると思うだろう。いや家庭や友人ばかりでない、宗教上、道徳上の本意である敵を愛するという精神をもって、敵に対しても十分の愛の心をもってその敵を感化していると思うだろうが、顧みて沈思熟慮すれば、事実吾々は真に敵を愛していない、真の和を保っている者では無いということがわかる。吾は確かに敵を愛

して居ると思う時は、半面すでに彼は自分の敵であるという事を認めて居るのである。心にすでに敵と云う感じがあってはトテも真の愛ではない。この場合安心して彼の犠牲になるの、身を捨てるのという事は事実出来ていない。

サアここに人生問題は起きてくる。即ち吾々が絶対の愛絶対の真を見出すことが宗教上の問題である。人生必ず一度はここに突き当ってくる。例えば人が死の関門を通り脱ける時になっては、如何に親密な妻子でも友人でも死に対する吾々の苦悶を除去することはできぬ。人は此処まで苦悶してくると宗教とは自己と他人との関係、換言すれば人と人との関係ではなくして、高大なる仏陀と迷える吾々との間に貫通を得るか否かになってくる。換言すれば相対界では絶対の力は得られぬというのである。そこで聖徳太子は、憲法の第二に、篤く三宝を敬せよ、三宝は則ち四生の終帰、万国の極宗なりと言われている。

(二)

世間で信仰を説く者がややもすれば、宇宙がどうの、哲学がどうのと高尚な学問上の詮索のみにわたる者があるが吾々の求めるところはそんな学理ではない、空論ではない。吾々はこの日常生活と高大な仏陀の境涯との関係を得たいのである。相対有限の我と絶対無限の仏との連絡を得たいのである。天人貫通の域に達したいのでがある。例えばここに一人の大富豪があっても、その富豪が他の貧しい者を救う方法を講じなかったら両者の間には何等の連絡も無いのである。又貧者が救済を求めても富豪がこれを容れなければ富者の有難味はないのである。又貧しく苦しみ悩める吾々人間同士が寄り合っていても、仏陀の絶対の富、力を得られなかったら、仏陀の有難味、宗教の味わいは全く無いのである。

今絶対の仏陀と相対の吾々との連絡をつくるのに二つの方法がある。其一つは、迷える人間が自分で勢一杯の力を出して理想的境涯にのぼり仏陀に達しようとするのである。なお少し分り易く言えば、ここに菩提の岸がある、その岸を自分一人の力で登りつめて、菩提岸頭の境涯はこんなのだと知りたいとつとめるのである。ところが実際に自分一人の力でこの岸頭に登りつくと云うことはすこぶる難事である。私自身の体験から云うと全然不可能である。時に自己の力を信じ切って居る人々の間には、この岸の半ばまで登って居って未だ見ぬ岸上をこんなものだと思い違えながら、安心せねばならぬと思って居る人がある。けれども吾々はそんな事をせねばならぬなど云う余義なくされた事では真の安心は出来ないのである、誠の連絡は得られないのである。

他の一つの方法はと云えば、前のとは全く反対の方法である。世の中の人はすべて悶え悩んで居り、苦しみもがいて居る、これを仏陀の境涯から見られて、どうしても冷然と見逃がすことが出来ないのである。大慈大悲の仏陀の遣る瀬ないお心から迷い悩む人々をご覧になってどうしてでも救ってやりたいと、その高大な絶対の力を添えられるのである。それをたとえると、前の方法にくらべると後者は岸の上から仏陀が大慈大悲の綱をおろされている、その高大な力の綱にすがって救わると云うのである。自分の力でそこに達しようとしても不可能なことを、上から下がった綱にすがりつきさえすれば自ら救われるのである。

即ち前者は自力信仰で、後者は他力信仰である。それでは他力信仰の真の味わいは何処にあるか、吾々が自己の力によって岸頭にのぼり得ると信じている間は、この有難い他力の味は到底わからない。その真の味わいについて私の友人が信仰に入った実例をお話しよう。

(三)

私の友人に西川という理学士がいた。理屈の上から仏を信じようと努め、そんな仏が居られるなどとはどうしても思えぬといって信仰心が起きなかった。ところがその人が遂に胃癌になって病床で苦しんだ。或る時、信仰を求めて苦しんだ末、枕頭に居る兄さんを省みて、兄さんはそんな仏があると思われますかと叫んだ。私は言った。君は仏の境涯が分らぬから信ぜぬと云うが、それは大なる間違いだ。吾々岸の上の境涯が分って居れば今更に仏に助けて貰う必要はないじゃないか、吾々は実に生死岸頭の下に苦しんでいる人間である。吾々の信じるのは岸の上を眺めて後に信じるのではない、徒らに岸上を眺めて憧憬するのではない、唯吾々は岸の上から垂れた救いの力を載くことを有難いと信じるのである。唯信鈔にも

例えば人ありて高き岸の下にありて上ること能わざらむに、力強き人岸の上にありて綱をおろしてこの綱に取りつかせてわれ岸の上に引きあげんと云わんに、引く人の力を疑いて綱の弱からむことをあやぶみて手をおさめてこれを執らずば更に岸の上にのぼる事を得べからず、ひとえにその言葉に従って掌をのべてこれを執らむには、即ち上る事を得べし。唯信心の手を延べて誓願の綱を執るべし。仏力無辺なり、散乱放逸の者をも捨つることなし、唯信心を要とす、其他を顧みざるなり。

と云ってある通りに信仰と云うは、理屈の角が折れて後に起きるのである。唯信仰してもまだ救われんか、救われないか解らぬから一度仏陀の境涯を見届けた上でなければなど云って仏の力を疑うようではトテモ信仰は得られるものでない、唯信心の手をのべて誓願の綱を執りさえすれば仏の大慈大悲は悪人善人の差別なく必ず救い上げられるのである。故に親鸞聖人も、歎異抄三章に、

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや、しかるを世の人常に曰く、悪人なおもて往生す、いかにいわんや善人をやと、この条一旦そのいわれあるに似たれども本願他力の意趣にそむけり。その故は自力作善の人はひとえに他力をたのむ心かけたるあいだ弥陀の本願にあらずしかれども自力の心をひるがえして他力をたのみたてまつれば真実報土の往生をとぐるなり、煩悩具足の吾等はいずれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあわれみ給いて願を起こし給う本意、悪人成仏のためなれば他力をたのみたてまつる悪人もっとも往生の正因なりよって善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと仰せられそうらいき。

と仰せられている。仏の親心から見れば悪い子ほど却って可愛いのであるから自分のような者でも仏に救われるだろうかなど、そんな遠慮心をこちらから出す必要はないのである。たとえば先日の鉄嶺丸の沈没の際の如きでも遭難者の中で誰が一番先に救われるかと云えば、よく海を泳ぐ事の出来ぬ者である。即ち善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をやのお言葉にかなうのであって、他力の救いと自力の悟りとはすでにこの根本義において相反して居るのである。悟りの方ではかえって善人を先にするが、救いの方では全く反対である。ここに他力の真の味がわかる、他力救済の本旨はここにあるのである。

親鸞聖人はまた「往生の一大事専ら如来にまかせ申すべし」と言われておる。南無何弥陀仏、々々とひたすら六字の名号を唱え仏の力を信じ岸上から垂れた綱にすがりさえすればよいのである。

説いてここまで到った時、西川君が多年の疑問は釈然として晴れ、これより熱烈なる信仰の人となったと同時に、西川君の精神は大分変って来た。君が今まで善だと信じきっていた善はいまだ真実の善でなく、今まで敵を愛し、他人に同情したと思って居た愛や同情は真実でなかった事を発見した。かくて君の信仰はいよいよ堅くなってきた。

こんなことは独り西川君ばかりでなく理論的に信仰を得んとする今の青年にはよくあることである。なお私の信仰に入った動機をお話して見ると、私は自分の実行の上から考えて自分がよく出来ると思って居る間は決して出来るものでないことを知ったのだ。今日の社会を見渡して見ても理想の高い人程余計に苦しんで居る。自分の理想と現実の境遇とが不如意なのを苦しみ不足に思い、自分の理想のためとかえって敵を作っている。

トルストイは世の中は無抵抗にさえ行けば敵はないと云った。或はそうかも知れぬが、今人が右の頬を打った時に直ぐにまた左の頬を向けて打たせるような事が実際に処して出来るだろうか。それが理想ならば知らず、事実においてそんなことはとても出来ぬものだと知った時、私はもう堪えられなくなった。トルストイの無抵抗も信ずることができぬ、自分の力で為し得ると信じていたことも事実の上に不可能である事を知っては自己の力そのものの頼み甲斐ない甚だ微弱なものであることを感じて非常に苦しんだ。

この時私は自力のたのむべからざるを知って他力の真の有難味を感じ、如来の本願とはこれである、この弱き吾を救う真の親、真の友は仏であると思うた時私は安心した。

他力によって救われたいと岸の下から岸の上を眺めて徒らに岸上を憧憬している者は、他力の中にあってすでに自力の危きに陥ちいって居るのである。一向専修の念仏の綱を頂いてこそ他力の本願は達せられるのである。私はこれらの体験によって幸にその有難い綱を頂くことができた。

嗚呼人生にこの仏まします、この恵みあってこそ安んじてこの世を渡ることが出来るのである。顧みれば仏力によらねば満足の出来ぬものを私は今まで不可能の人間にそれを求めていた、又自己に求めていた。敵でない人を敵だと思っていた、自分がすでに敵であっては、その敵をとても他人が愛してくれるはずはないのである。しかしその者に対する真の同情者が仏なることを知らせて貰うたのである。

（四）

ところが人生の要求には二つある。一は人に対して求める同情であって、一は人を救いたいと思う同情である、これを理想通りに得れば人はよく満足し安心することが出来るが、吾々相対の力では到底理想通りと言うことは出来ないために、前者の要求を持つ人は常に不足を感じ、後者の要求を持つ人は世間の道徳の見界からは感心なことであるが、時に力の及ばぬことを悲しむのである。これは広大無辺の力まします仏によらねば満足出来ぬことを人間に求め仏でなければ完全に出来ぬことを自分の力一つでしようと思うからそんな不満足を感じるのである。法然聖人も初めは自力によって安心を得ようとして多年艱難苦行をされたが「一心に弥陀の名号を専念して、行住座臥、時節の久近を問わず、念々に捨てざれば、是を正定の業と名づく、彼の仏願に順ずるが故に」の善導大師の御文を読まれて、吾より願を起すに非ず、仏より吾々を救うの慈悲にすがるのであるといただかれたのである。

こう話して居ると思い出すが、丁度昨年の今頃、私が吉

井町に滞在している時、滋賀県の大地震の急報に接して、そのまま近江の方に帰った。その際かしこくも今上陛下には北条侍従をおつかわしになってつぶさに罹災民の家をおたずねさせなされて居た。その時、北条侍従は罹災民の中でも最も貧困な、最も哀れなもの、災難を最もひどく負うた者からされて漸次軽い者に及ばされた。これを実見した私は、善人なおもて往生を遂ぐいわんや悪人をやの聖人の仰せを思い出して痛く感概にふけった。そして昨年また伊藤公がハルピンで横死を遂げた時、陛下がお使わしになった人は、矢張り北条侍従であったのを見て、わが陛下の大御心から吾々国民を見そなわせらるる時には、上公爵も、下一布衣の身もその慈愛に至っては変りなくお救い下さることを思って私はまた痛く感激した。仏の大慈大悲のお心もまたこの如きもので吾々掌に六字の名号も念じて救いの綱にすがる者を仏の親心からは貴賤上下、善悪男女の差別なく必ずお救い下さるのである。聖覚法印は唯信鈔に、

名号はわずかに六字なれば、ハントクがともがらなりとも保ち易く、これを唱うるに行住坐臥をえらばず、これを行ずるに時処諸縁をきらわず、在家出家、若男若女、老少善悪の人をもわかず、何の人かこれにもれむ

彼仏因中に弘誓を立つ　名を聞いて我を念ずればすべて迎え来たらしめん。貧窮とはた富貴とを簡（えら）ばず、下智と高才とを簡ばず、多聞と浄戒を持てるを簡ばず、破戒と罪根深きを簡ばず、但廻心して多く念仏すれば、瓦礫を変じて能く金と成らしめん。

この心これを念仏往生とす。

と云われて居る、南無阿弥陀仏、々々々々　（完）

——○——○——○——

一日ぐらし

正受老人

いかほどの苦しみにても、一日と思えば堪えやすし。たのしみもまた一日と思えばふけるこにもあるまじ。

親に孝行せぬも長いとおもう故なり。一日一日とおもえば理屈はあるまじ。

一日一日とつもれば、百年も千年もつとめやすし。

一生と思うからに大そうなり。一生とはながいと思えども、あとのことは知る人あるまじ。

死を限りとおもえば一生にはたされやすし。

一大事と申すは、今日只今のこころなり。それをおろそかにして習う日あることなし。

すべての人に遠きことを思えばはかることあれど『的面の今』を失うに心つかず。

信仰体験録

安波勲八

天命を知って人事を尽す

私の不治の病（胃ガンで手術不能）を聞いて東京の一友人から、中井式自彊術を勧めてくれた。これに対し、ご厚意はありがたいが、自分の病気の治療に対しては全く主治医にまかせてあるから私の方で工夫する必要はない、それは主治医の領分であると云って、例の療病の態度を書きおくった。ところが再び、

「貴方が病気に対して全く主治医にまかせてあることは感服の外はないが、主治医は貴方の病気を根治し得る絶対の力を持たないことは、死の宣告云々とあるのによっても明瞭であります。されば貴方の病気を主治医まかせにして治療に対して工夫する必要がないとは云われない。治療に対して工夫する必要のないのは主治医が病気を根治し得る絶対の力を持っている場合にのみ限ります。それ故に主治医のみならず貴方自らも治療に対して工夫する必要がある。ことに不治の難症を治癒した人々の体験を聞いて治療なされることが最善の方法であろうと存じます。

とにかくあらゆる最善の合理的療法を試みて病気を根絶すべきです。人事をつくして天命を待つのです、貴方の御病気に対する態度はあまりに消極的絶望的のようであります。もっと積極的に強くあってほしい、病気を征服せんではおかぬと云う態度、お心持になられるようひたすらお願いします」

と云う意味のことを書いて再び熱心に自彊術を勧めてきた。

私は成程そうだと思った。いかなることをしてもよくならぬという私の病気の本体を知らぬ人から見ると如何にも私の態度は消極的絶望的に見えよう。しかし私の病気の本体を本当によく知っている者には不治の病でも主治医にまかせておくことが最も利巧な方法であり、積極的態度であることがわかる。即ち私としては最も長く生きる方法であることがわかる。

真宗の立場では、人間は煩悩具足の凡夫として、よいことの出来ない者、罪の深いものと見られている。それを門

外漢から見ると、真宗の信者の態度は道徳を行うということについて消極的のように思われるかも知れない、よいことが出来ぬなど考えずに、何処までも善い事をしてみせる、善い事が出来るんだと考えて精進する方が善い行いが出来る、すなわち積極的態度と思うかもしれない。

しかしいくら善い事が出来る、せねばならぬと頑張ってみても、絶対には本当の善、絶対善は出来ないのが事実であるから仕方がない。絶対によくなれるんだと見ていたら必ず行きつまる。（註・ゲエテのファーストに、「すべて善良な人は、よくなりたいと願っている。しかしそれは不滅であるが、無力である」とある。翼を失った小鳥が大空をあこがれて、地上を走り廻るに等しいと知らされる）

しかし、このよくなられぬ者を、善くなられぬと、仏がかねてしろし召されて、その者にそそがれる大慈悲を身にうけて、そこに安心して、自分に出来るだけの善い行いに精進する態度こそ積極的ではあるまいか。そこには行き詰りがない。

故に、世間的には、人事を尽して天命を待つべきかも知らんが、絶対という立場から云うと、天命を知って人事をつくすべきである。（註・人間が人事を尽したと云えるだろうか。子を亡くした親が、あの時、このことと、自分の足らなさを歎き、後悔の涙、愚痴はやまない、親として為すべきことを尽したなどと云えたものではあるまい。これに反して、不治の病を不治と知らされて、不治は不治のままにそれをうけて、その日その日の出来るだけのことをするのが大切な道である）

罪悪深重の身を仏の教えの鏡に照らされて、それをそれと信知して、佛心のまことに導かれながら、この身に出来るだけの道を進まうと努力する態度こそ、最も積極的であると信ずる。

（大正十五年六月四日）

真の意味の死の宣告

死の宣告される人は多いが、死の宣告を受け取る人は案外にすくない。

或人が、私も四年前に死の宣告されましたと。よく聞いてみると某医師から食道ガンだから到底助からぬと云われたのだそうだ。そこで他の医師につきレントゲン検査をして貰い、また田舎の医師から処方された薬を根気よく用いていたらよくなったと云う、それを聞いて私は云うた。

「それは本当の死の宣告を受けたのではない、医師は宣告したかも知らんが、貴方は死の宣告を受けていない、外の医師の治療を受けたのが何よりの証拠じゃ。したがって貴方の体験は真の意味の生死厳頭に立たれた体験ではない」

と申したら、其方は成程そうだとうなづかれた。

或宗教家が、拙著「死の宣告を受けて」を読んで、「死

の宣告を受けておるのは貴方に限ったことはない。私共も同じである、御文章にも、誰か百年の形体をたもたんや、出るいきは入るいきをまたず、などとすでに死を宣告されておると」いわれた。

私は早速これに答えて次のように云った。

「われわれは教によって死を宣告せられておるが、われわれ自身は死の宣告を受け取っていないのが実際ではないか。（註・西哲も「太陽と死とは凝視出来ぬ」と告げる）

そこで本当の意味の生死巌頭に立ち得ない、故に生死問題が実際問題とならぬのである。

私の場合においては、医師が私に死を宣告し、私は医師の死の宣告をそのまま受取っている。これが即ち、真の意味の死の宣告である。即ち真の意味の生死巌頭に立っているのである。私のように長い間、真の意味の生死巌頭に立っている者はすくないであろう。この間に与えられた体験をとおしてうける佛心の大悲の醍醐味は、まことに特権とも云えることである」

と私は答えに。

（大正十五年六月二十六日）

あの頃

高村光太郎詩集より

人を信ずることは人を救う。
かなり不良性のあったわたくしを
智恵子は頭から信じてかかった。
いきなり内懐に飛びこまれて
わたくしは自分の不良性を失った。
わたくし自身も知らない何ものかが
こんな自分の中にあることを知らされて
わたくしはたじろいだ。
少しめんくらって立ちなおり、
智恵子のまじめな純粋な
息をもつかない肉薄に
或日、はっと気がついた。
わたくしの眼から珍しい涙がながれ、
わたくしはあらためて智恵子に向った。
智恵子はにこやかにわたくしを迎え、
その清浄な甘い香りでわたくしを包んだ。
わたくしの猛獣性をさえ物ともしない
この天の族なる一女性の不可思議力に
無頼のわたくしは初めて自己の位置を知った。

法悦抄

聞光願生

○

他人様から責任をなすりつけられるとたまらなく重くつらい。しかし当然自分の責任だと明瞭にさせていただいて背負うときは、どんな重い責任でも重く感じない。

どんな重い責任でも背負い、うけて越えさせていただけることは、信仰生活のめぐみである。

○

一人旅はなかなか道が遠い。二人で語り合いながら旅すれば遠い道でも知らぬ間に行きつく。二人連れで歩いたとて飛んで行くわけではない。矢張り同じ距離の道を歩くのだが—。

私の生活をふり返って見たときに、何一つ愚痴の種でないものはありません、すべったことも、ころんだことも、すべてが小言の種にしかなりません。

光を聞くと、過去をふり返って見たとき、私のへて来た道はすべて私にとっては一本道だった。起きたことも、ころんだことも、ことみなが光を聞き得るまでの道程だったと気づかせて頂いた時に、過去のすべてが意義づけられます。

清水凡秀

○

光に触れるという体験は、言葉でも文字でも現わされない。私にとって御光にふれさせて頂く事の一番手近なことは、お念仏の生活にいそしんで居られるお方の生活に触れることだ。

たまたまお話を聞き、本を読んでも、ややともすれば、私の勝手な都合のよい生き方の口実に用いたくなる、勿体ないことだ。

光に触れることは、言葉をかえて云えば、信仰生活をなされているお方の御生活に触れることに外ならず、かくて念々称名常懺悔の生活をさせて頂くことがより尊いことだと思う。

（昭和九・七月）

○

土用とは云いながら、余りに涼しい。凌ぎ易いが稲はこ

まる。自分を鞭打ってくれる人がなければ、楽ではあるが心がふとらぬ。毎日お念仏に鞭打たれる自分は、本当にしあわせ者だ。

「有難うございます」と「申し訳けございません」とは、離すことが出来ない。「有難うございます」のみなれば恩に馴れ「申し訳けございません」のみなれば、向う様のご親切様をすなおに受けとれぬ。

○

私の姿は、明日何をしでかすやらはかり知れない。私の姿を見れば見る程あぶない。はなはだ不遜の言葉であるが常にお友達に申します、もし万一私の様なものをめあてにして、道を求めて居られる方があられたならば、仏様と直き取り引きをお願いしたい。（昭九・九月）

○

いかなる人でも絶対無限の仏光に対すると、そこに出てくる価は零（れい）である。自分の価を零としてすべての人に対する時、そこに出てくる答は無限大の力がある。（昭九・十月）

○

人と人との交際は大低利害関係を基としている。だから刎頸（ふんけい）の交りなどと云って居ても、利害関係の相反するとき他愛もなく離れてしまう。

全く人と人との交りぐらい浮雲めいたものはない。それを変らないもの、いついつまでも続いて行くものと見るところから悩みが生れる、情ないことだ。

魂の通う御交りによって始めてつきない、破れないお交りが出来るのだ。それは、よし利害関係が生じて、いやな心がおきてもなお心の底に通うものがあるから……。（昭九・十一月）

○

無心に遊ぶ子供の姿を見た時誰か怒る気持になり得ようう。天真爛漫の童心に接するときほど、我が身を省みさせられるときはない。童心とは無我の鏡ではなかろうか。ひるがえって私の姿を見た時に、無我の境とはあまりにかけへだたり、そはただ遠い大空の月と仰ぐのみである。

日々利害の問題にとらわれて、はてしない泥田に沈むあさましい生活。されどされどやるせないみ親の念願の成就せられた至徳の尊号の賜により、み親の一人子とさせて頂き、泥田の私の上に及びもつかぬ月影を宿させて頂くことただただ有難いことだ。（昭和九・十二）

○

またもや年を重ねることになった。いつでも年末を迎えるたびに、つい愚痴がこぼれる。何をしてこの一年をおくったのかとふり返って見たときに、その思いを深くせずには居られない。

しかし、み仏様の教を聞かしていただいたその事ばかりは力となって私の上に現存してまします。そして来る年を迎える根本の力となって下さる。そればかりは何と云ってもありがたいことだ。（昭和十・一月）

○

ある友達のご家庭に、子供達が大きな雪の山を造って中を空洞にした。そして二人ばかりその中に入って火を焚きはじめた。

ところが上の方に穴をあけるのに気付かぬものだから、けむりの出場所がない。たまらなくなって、その中から這い出した。その様子を見て思わず笑ったが、しかし私の生活はまったくこの雪遊びと同じだ。いやそれ以上、けむり出しどころか、出口さえも閉ざして、けむりにむせんでいるのが私の姿なのだと気づかせていただいた時に、ただお念仏一つによってけむりを解消させて頂くばかりだとありがたく味うた。（昭和十・二月）

○

「健康第一」の標語を見れば、持病もちの自分としていくら病院あるきをし、薬を湯水のように浴びてもなおらぬ自分としては、これ位無慈悲な言葉はない。そりゃあ健康な人、及び健康になり得る人にとっては音楽のようにひびくかも知れぬが、到底健康体に縁のない私にとっては無慈悲の言葉とひびくばかりだ。

「金が無ければ首の無いのに劣る」との言葉も、また同様に考えられる。要するに健康になる道、金持ちになる道、人格の向上の道があっても、私にとっては縁の遠いことだ、今幸に、この私の姿をとっくの昔に見透されておこされた仏様のみ教を信順することによって、さびしいままに明るい生活をさせて頂くこと、何ものにもかえられぬ有難いことだ。（昭和十・二月）

○

「元旦や何がなくとも親二人」

肉親は亡びることがあるが、釈迦・弥陀の父母は実に無量寿のみ親である。幸いなるかな、心の御親によって、何ものにも満たされぬうつし世にありながら満たされた生活の中に新しい年を迎えうることは、何ものにもかえられぬ身の冥加である。（昭和十一年・一月）

一道会の記

榊原徳草

次いで**城一雄**様のお話を誌します。

今日ここに居られる方は私には新しい方々です。私は一昨年、茨木県の稲田の正念寺にお参りして聖人の御跡を尋ねました。報恩寺は浅草に移ってしまって今は空寺のようになっています。人影まばらでしたが本堂に入りますと、御賽銭箱の上に白い餅が二三十供えてありました。私は報恩寺の門徒の方はどうなっているかと思って参りましたのに、それで大変嬉しくなりました。ここにお集りの皆様も御先祖の力でお参のことと思います、ナムアミダ仏、々々

さて今お話下さった川畑先生は第七高等学校の同期ですが、学校の造志館に「暁烏敏師来る」とビラがありましたが、仏青の人々は地獄極楽のことばかり考えていると軽蔑しておりました。昭和元年頃です。

あれから四、五十年経ちました今日、どうしても聴聞せねばならぬ心になりました。私は暁烏師は知りませんが、そのお弟子の方々のお世話になって居ります。今朝も高倉会館で暁烏節男師の法話がありました。あの先生も胃を切除したのでしょう、お弱いお様子でした。その先生が、我々は仏様のおいのちを生きているのだ、というお話でした。

これを諸先生に申し上げたかったのです。川畑先生は白井先生と同じ病の手術をされました。お大事にして下さいとお願いします。

北米から海野先生がおいでになっているのでつい思い出しますのは、明治十年に安芸門徒の方々がからびとさんと云われた接客業者になって北米に行かれ、死なれ、今も帰らないのです。あちらで接客業をしながらお念仏していられたようです。それをアメリカの清教徒の人々が見て、頭が下るが、どうしたことか、何であるか、ということで聴聞が始ったということです。それでは毎週土曜日に教会を使ってくれと言われお茶の接待などしてくれ、今でも続いているそうです。そういう人々が居られて真実に聴聞が始まったのです。何も偉い方々がお念仏して居たのでなくていやしめられたからびとさんと云われている方々によって自然に伝わったお念仏。それにつけても何も知らないこの

人々のお名号が世界に平和の光をもたらしていることを深く心に銘じております。

沖縄には姫百合の塔があります。爆弾と砲火のために一本一草もなくなったその地に、田原師がお骨を拾って姫百合の塔を造られたのです。田原師の寺も爆弾で無くなったのですが、アメリカ駐留兵のお父様達が感激して、今は立派な寺が復興しました。護国寺という寺です。あちらにお訪ねの人はこの寺へもお参り下さい、そこにひしひしと身にしみるものがありましょう。からびとさんや、何も知らずに御名によって救われて行った人々が、大きな光をもたらしております。

先程川畑先生が、お母様の慈愛のことを話されましたが、暁烏先生も、一億に一億の母はあれど、わが母にまさる母なしという碑文を刻んで居られると聴きます。私も聴聞せねばならぬとなりましたのも母のおかげです。母は昭和三十五年二月に八十八才で亡くなりましたが、死の三ケ月前にその枕元で御文の三帖目第三通の「タダコヱニイダシテ念仏バカリトナフルヒトハオホヤウナリ、ソレハ極楽ニハ往生セズ、コノ念仏ノイハレヲヨクシリタル人コソホトケニハナルベケレ。ナニノヨウモナク、弥陀ヲヨク信ズルココロダニモヒトツニサダマレバ、ヤスク浄土ヘハマイルベキナリ」の一文を読みました。

母が申しますのに、十九才の年に、口にお名号を称えれば助かると聞いたが、何で助かるのか疑問に思っていたがこのように云うて下さるとよく解る、早くそういう風に教えて下さればよかったに、それを聞いて安心しました、と云って亡くなりました。

私はそれを聞いて不浄説法をしたのではないかと思い、母は何を喜んで亡くなったのかと思い、これが私の聴聞の動機となったのです。今でも母の励ましが耳に聞こえます。十九才から八十八才までの聴聞、身をもって示された母の励ましです。今でも私ははっきりしませんが、命は僅かです「口に御名を持てよ」それに違いないのです。々々。

次に**井上善エ門先生**のお話を誌します。

年一度の一道会に毎年続けて参れませんが、今年は都合がよく参らせて頂きました。

私は白井先生に約五十年近くもお育てを受けました。先生が広島文理大学をお退きになり、当浄住寺のお部屋をお借りになり一人でお出でになりました、そこの御部屋においでした。その後近くの土地を買われお宅を建てられてお住居になりました。

先生がここのお座敷に居られた頃にお邪魔して、その間に色々の想出があります。思いがけないお病気になり驚き

ましたり、入院されたことなどが心に浮かびます。

丁度今年は先生御往生の満三年になりました。昨年の夏に、お残しになった短歌を集めて「青蓮華」という歌集を私共数人が作らせて頂きました。その中に唯一点だけ詩があります。昭和三十九年一月に詠まれた詩です。先生が七十五六才のお歳の詩でこれを拝見しますと、先生のご一生、先生のお心そのものがすべておさまり、その中に凝集しておるように感じます。それが私の頭の中を常に往来し続けております。それはこういう詩でございます。

業風吹いて止まざれども
ただ聞く弥陀招喚の声
声は西方より来って
身を繰りて髄に徹る
慶ばしきかな
身は娑婆にありつつも
既に浄土の光耀を蒙る
あわれ　あわれ　十方の同胞
同じく声を聞いて
皆倶に一処に会せん
南無阿弥陀仏

この詩をこの一年程口誦むのですが、その都度生きた正しい命に出会わせて頂くというか、そういう感が致しすま

御一代聞書の中に「一つことを幾たび聴聞申すも、いつも珍らしく始めたるように新らしく候」とありますが、そのように、いつも新らしく珍らしく先生の詩を誦するたびによみがえってまいります。

そういう事と、も一つ心に往来することは、皆様もご承知の東山魁夷画伯であります、テレビなどで放映されました人ですが、この東山君とは不思議な因縁で同じ年で、私と向い合いの家で、幼稚園、小学校、中学校でずっと一所でした。神戸二中を卒えて東山君は東京の美術学校へ行き私と別の方向へ進み、別れたのですが、独特の画風を開いて輝く人となるとは思いもよらぬ事でした。その東山画伯が数年前私に話したことがあります。

それは、彼には兄弟三人、兄が一人、弟が一人、彼は真中でした。その兄が亡くなり、又弟も亡くなり、全く天涯孤独になったんです。そして戦争が劇しくなって参りました頃に出会いしたことが大きな自分の命の転換であったと云うのです。自分一人ぼっちになったその頃、人間というものは無常なものだ、自分の肉身の者が皆亡くなってしまった、自分の命も考えてみると明日はわからない、人間というものは実に無常なものだとつくづく身につまされて思ったと云うのです。

ところが、フト転じて自然というものを自分が見つめて

—東山君はご承知のように自然を描き続けてきたのですが—その自然を見つめると、自然というものは無常そのものだ、とどまるところなく移り変ってゆく、無常な自分と無常な自然との不思議な出会いと申しますか、その時に美という大きな世界に出会う、それを除いて美に出会う世界は私にはない、と思ったと申します。

それに続いて、今まで不変なものとか、普遍的なものとかを美の所在として追求して居ったことがあるけれども、そういう不変なものは死んだものであると、加えました。私はその言葉を聞いた時ドキッとしました。そしてそれに続けて、人生というものも、生きるひとときと、ひとときはそういうものであろうかという話でございます。

私共は頭で無限なるもの、永遠なるものを予想しまして何とかしてそれに出会はそうとするのですが、それは一つの死んだものでしかない。そういうものの現れ方は、そういうものではなしに、東山画伯の言葉を借れば、無常な私と無常な自然が不思議に出会う瞬間、その時にこそ変ることのない、まあ芸術家の境地はそれをどのように受取りますでしょうか、その出会った美を自分の拙ない筆で描きとどめてゆく、それより外に自分の芸術として働いてゆく世界は無いということがはっきりしたと、そう云ったことがあります。

そして私は戦争に出ておりましたが、東山君は昭和十九年に召集令状がきて、送られた所が九州の熊本で、そこでは練瓦を何枚か背負って匍匐前進の練習をしていた。一体何でこんな事をするのかと思ったが、それは敵前上陸が起った時に、爆弾を背負って戦車の下にもぐり込むその練習と判ってきた。

或日のこと兵隊にも休日が与えられ、戦友達は遊び場へ行くが、彼は一人プラリと熊本城へ登って、東の方をみると、今まで見たこともなかったような美しさの極まりとでもいうような自然に出会わしたと云います。そして何とか命があるならば、自然を描き残しておきたいという切なる願いが胸に湧きおこった。自分に思われたことは、今までの自分の画業というものが素晴らしい構想を描き人を驚歎させるようなものを描こうという思いが常に自分を動かしていた時だったと云う。

ところが城に登った時は、敵がいつ上陸するか解らない、その時は戦車の下へ飛び込む、そういう覚悟の時ですから、一生もこれで終りである、今まで一生の間磨いてきた芸術上の技法は皆意味のないものになってしまった。そういう気持で、その時、阿蘇の連山の麓を見て居った。その時、えも言われない美しさに出会ったような何かおのおのきを感じるような気がした。ところがフと我に返ってみる

とこの景色は日本の何処へでも行けば見られる風景である、今までそういう風景に幾度も接してきたはずであるのに、今日はどうして驚くべき美しさに出会うことが出来たであらうかと、自分自身に問いつ答えつしたとのことです。

これは時が違いますが聞いたことがあります。「無常なものと無常なものとの不思議な出会いの瞬間より外に自分にとって美に接する場所はない」という言葉が、白井先生の「皆倶(とも)に一処に会せん」のお言葉とまたしても行き来して居ります。

私共が仏様の永遠のお慈悲であるとか、御本願であるとか、こういうことを一つの画として、それを追いかけて居るようなことが多いと思いますが、そういうところに仏様は居られるであろうか、先程申しました、そういうものは結局死んだものでしかないという東山君の言葉がよみがえってまいるのであります。

親鸞聖人が歎異抄に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」とのお言葉、今のことから思い合わせてみますと、まことにこの私と或るものとの不思議な出会いでございますから、阿弥陀仏が一切衆生を念願して建てられた本願であるという反省的思念というものが、そこに現れてくる余地がない、お出会いした時は、その自分とそこに現れてくる。東山君の言葉を借りれば、永遠の美しさとの出会いがあるだけでありまして、普遍とか永遠とか不変とか、概念や思念が入りこむ余地のない。そういう時に私と真実者との出会いの場所が開かれて居るのではないか、そんなことを思いまして白井先生の

「業風吹いて止まされども
ただ聞く弥陀招喚の声
声は西方より来りて
身を繞りて髄に徹る」

身をめぐって髄に徹るというお言葉が、何とも云えぬ気持がします。何とかしてという親心が、私の身体を廻っておいでになる、そして遂に髄に入りこんで下さるので、

「慶ばしいなか身は娑婆にありつつも
すでに浄土の光耀を蒙る、
あわれあわれ　十方の同胞
同じく声を聞いて
皆倶に一処に会せん
南無阿弥陀仏」

とある。そういうおこころは、今申しました現実的体験というものと宗教的体験というものとの違いはありましょうが、何か真実との出会いについてもどこか通じるものが

ある。こういうものが去来しまして、昨年白井先生の歌集を編集しまして以来、この詩が今もなお脳裏に往来しておる次第でございます。失礼いたしました。

以上で先生方のお話は終りましたが、今年は珍らしく富山から表（旧姓・佃）かずいさんが、四十年振りで参会されお互に久方の面語を、命なりけり、と喜んだのであります。お話もして貰うつもりでしたが時間がなく、残念ながら会を閉じました。

その後、相変らずの精進料理で約三十名程と食事を共にして、三々五々散会となったが、しばらくは互に談合が続きましたが、宿泊者は今年は少なく、四国の葛西姉、高塩姉のお二人であった。

翌日も長崎の松本毅さんと、も一人の法友が来られ、会場の後片付けを手伝って下され、帰郷の列車にギリギリ間に合うまで、五月の長崎の法筵の回顧談や、法味を交わし合いましたが、名残りの余燼は翌日もつきなかった。

無事に私も今年の一道会を終って、一期一会、いのちは期し難いが来秋もこの法雨に浴したい願いが湧いてくるのであった。

（五十一年十一月三十日）

東山画伯のことば

○

絵になる場所をさがすという気を棄てて、
ただ無心に眺めていると、
相手の自然のほうから、
〃私を描いてくれ〃と
囁きかけているように感じる風景に出合う。
その、何でもない一情景が私の心を捉え、
私の足を止めさせ、私のスケッチブックを開かせる。

○

私は白い紙に向い合う。
それは紙では無くて鏡である。
その中には私の心が映っている。
描くことは、心の映像を、
定着させようとする作業である。

○

人間は生かされていると観るところに、
初めて生と救いを後年に私は見出した。
その基盤は、母が人間の宿業を諦観し、
子供への愛情の深さから忍従の人となった、
そうした深いものに根差していると思う。

念仏詩抄

木村無相

往生の事は (一)

往生の事は
念仏しつつ
〃ただ念仏して
弥陀にたすけられ
まいらすべし〃
ただその一つを
み名に聞くこと

ただ念仏して
弥陀にまかせ
まいらすべし——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

往生の事は (二)

往生の事は
まるまかせ
如来のおはからいに
まるまかせ

まかせるというも
ナムアミダブツ
み名をいただく
ほかはない

ただ　ただ
み名をいただくだけ
ナムアミダブツと
いただくだけ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

この心は

この心には
手をつけない
こと

この心は
放っておけば
よいのです

あとは

ただ念仏すれば
よいように
なっているとのこと

ただ念仏すれば
よいように
なっているとのこと

あとは

お念仏さまが
よいようにして
くださるとのこと

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

その下にあるのは

大量師仰せに
〃われ仏法を知る身となった
と思うが早や我が機を
見うしなったのじゃ
その本心を押してみると
さらにその実がない
たまにはその心が起ったのは
全くお加えの仏智である
その下にあるのは固有の
迷心じゃ——〃

その下にあるのは固有の

迷心じゃ
その下にあるのは
その下にあるのは
その下にあるのは

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

まかせるということ

猪野恵空師仰せに
〃ハカライも　ハカライなり
ハカラワヌも　ハカライなり
かく言うも　ハカライなり
かく思うも　ハカライなり
ハカライは　我が心なり
ただ如来に　まかせまいらするを
ハカライなきとは申す
なり――〃

まかせるということ

ただナムアミダブツ――

ナムアミダブツ
ナミアミダブツ

法信抄

「私は昭和四十五年に一度、越後の五合庵等、良寛さまの御旧跡めぐりをしたのでありましたが、このごろ雪に閉じこめられて、良寛さまが特に思われ、良寛伝や、良寛歌集をひまみては読んでおります。

草の庵にねてもさめても申すこと
ナムアミダブツ　ナムアミダブツ
良寛に辞世あるかと人問はば
ナムアミダブツと言ふと答えよ

二月十七日（木）朝

「御一代聞書」私解

花田正夫

われはわるし

蓮如上人の御一代聞書は信から流れ出る行（ぎょう）をそのままに語られている。歎異抄は信心を中心に人生各方面にわたって説かれているが、行は信の自然の徳とされて詳細に述べられていない。私のような横着者はよく聞書を頂かねばならぬと思っている。

さて、聞書の五十八に、

誰のともがらも、我は悪きと思うもの一人としてあるべからず。…これによりて、一人づつも心中をひるがえさずばながき世地獄にふかく沈むべきものなり。これというも何事ぞなれば、真実に仏法の底を知らざる故なり。

とある。

誰のともがらもとある限り、そこに私が居る。平素の生活は、われよしかれあし、で、外の事情如何で、争うたり、妥協したりしてすごしている。この心中をひるがえさないと何時までも地獄に深く沈むと誡められる。

聖徳太子は「共にこれ凡夫のみ、是非のことわり誰かよく定むべけんや」と仰言る。文字通りその通りでいやといわれない金言である。然しながら、私自身にこのことが実行出来るか、仰せが身についているかというに、そうでない、いつもそむいた生活である。

そこに、どんなに聞かされても、石が水をはねかえすに似たしぶとい、かたくなな身を省みさせられると共に、この身を、きびしく、そしてあたたかく涙をもって見まもって下さる御心にふれて、お念仏にかえらされるのである。

私は異状に反抗心の強い身で、そのためにいつも失敗をくりかえしているが、父が涙をもってそこを誡めてくれ、それ一つが心残りだと云って亡くなった。その父の涙が折にふれて反抗心に燃える時フト心に浮かぶ、すると空気で張りきったゴム球に針で穴をあけると段々に空気が抜けて軟くなるように平静にかえらされる。反抗心だけでした行動は自他共に破壊するばかりである。このようにして生涯反抗心に終始する私が、父の涙にまもられて、つまづきながらも歩むことが出来るように、われはわるしと思えぬ者

を排撃しすてられるのでなく、悲憐して下さる御心をそこに拝するのである。

こころえたと思うは心得ぬなり

同じく仰せに「心得たと思うは心得ぬなり、心得ぬと思うは心得たるなり。弥陀の御たすけあるべきことの尊さよと思うが、心得たるなり。すこしも心得たと思うことはあるまじきことなり」と仰せられ候。

禅家の古歌にも、

さとりとはらさとらぬまえのさとりにて　さとるというもなおまよいなり

とある。白隠禅師が青年の頃、一つのさとりを得て、それを持ち歩いていた時、幸に信州飯山の正受老人にあい、その慢心を打ち砕かれて広大な天地に出られたと聞く。

大戦中であるが、偏頗な宗教を盲信して刑務所に収容された青年があった。母も姉もこのことを苦にして、その人に会ってくれと頼まれた。刑務所に行き、その苦労を伝えると涙をもって、すみませんと云う。

さて「君の今の心境は」ときくと、すっかり態度を改めて「大体、神のことばと、人間の作った法律とどちらが正しいのですか、私は神のことばを信じ、たとえ無期であれ、死刑であれうけて行きます」と云う。そこで私は思わず、「君の信仰はそんな程度か」と告げると、「これ以上の信仰がありますか?」と怒ったように聞きかえした。

そこで私は「君、親だと思う、子だと思うて居らねばならんのは義理の親子ではないか。生みの親子は、そうした思いも無用である。君のたとえ殺されてもと云い張る心のしこりがとけ、そういうことも無用になった時、広く自由で明るい天地がひらけるのだ」と答えた。

その帰りの道々、親鸞聖人が、十九願、二十願のわが善根をたのみ、わが称える念仏を力にするしこりが、十八願の絶対他力の仏心に溶けて、行者のよからんとも悪しからんとも思わぬ、もとより願力のしからしられる境涯に悠々自適して居られる徳光をしみじみと仰いだ。

往生は一人一人のしのぎなり

かって道元禅師が師を求めて中国に渡り、天童山に如浄禅師に導かれた。その時、同行の友は病死したが自分の心が開けぬことを悲しんで必死の坐禅を続けていた。その時隣りに坐っていた中国僧が疲れて居眠りをしたのが如浄禅師の目にとまり大叱責をうけた。その時、道元禅師は、自分は起きていたが心が眠っていたと気づき、そこに大きな世界がひらけた。早速立ち上って仏前に御礼をしようとすると、後ろからそれを察知した師が「脱落身心、身心脱落」と問いかけられた。

道元禅師は、静かに仏前に御礼をすませて師の方に向かい「和上みだりに人を印可すること勿れ」と答えた。すると「脱落身心!」と師は喜ばれ、師弟共に合掌し、且つわび、且つ謝されたと伝えられる。

私はこの時の禅師は、人を離れて仏心と直結していられる尊厳さに心うたれる。ニイチエの超人の中に「師よ師よとあがめるだけが本当に師につかえる道ではない。速かに師の冠をとれ、その事をこそ本当に師は喜ぶであろう」と言っている。このニイチエの言葉も、仏心に直結されると時、文字通りにうけとれるであろう。

釈尊が御入滅を前に「人によるな法によれ」とくりかえされている。そして「法を見るものは我を見る、我を見るものは法を見る」とはかねてからの仰せであった。

親鸞聖人は「親鸞弟子一人も持たず、如来の教法を我も信じ人にも教えきかしむるのみ」と仰言っている。その如来の教法を聖人を通じて一人一人が聞信させて頂くばかりである。

私は、はじめに、聖人のお言葉は解るが、そのまんま如来の金言であることが頂けなかった。それは人が見えて、法が見えない状態である。ところが、種々のおそだてをうけているうちに、聖人のお言葉はもとより聖人の言葉であるが、それは分別智しかない人間の言葉でないことに気づき、お言葉のいたるところに仏の智慧と慈悲がキラキラと輝いていることに驚いた。

親鸞弟子一人も持たず候とあるが、沢山の人々を導かれその人々に随喜されている聖人が弟子一人も持たずとは一向に合点のいかぬことであるが、仏の大悲心に身心共に満たされた聖人の人生手放しの信境である。

親鸞一人がためなりけり、と弥陀大悲の御苦労を御身一人に頂かれる聖人は、理屈から云えば矛盾である。十方衆生のこらず救済せんと誓いたまう本願をどうして一人がためと信掌されたのであろうか。そこに理屈はない、一子の如く憐愍される仏心を直かにそのままうけとられた自然の感銘である。そしてそのまんまが一切衆生を救済される仏の御働きと何の矛盾もないのである。一切の中に自己を見出され、自己の内に一切を容れられる聖人の微塵の隙間もない大信界である。

こうしてひろいあげると到るところに如来の声がみちている。だから私は聖人を通じて弥陀仏の智慧の文珠菩薩、慈悲の権化の観音菩薩を拝するのである。それは決して聖人を従らに祭りあげることではない。秋の夜空に皎々と輝く明月を仰ぐ時、月には光はないけれど、太陽の光の照り返しであるように、弥陀廻向の御名の徳光の返照として功徳は十方にみちて下さるのである。

あとがき

葉桜の色も濃くなりました。親鸞聖人の降誕会が各地で催され、念仏の声も一入高まる好期となりました。

今回は、「物は心で頂き、仏法は身にいただけ」との先哲の導きを仰いで、近角先生の人生問題と信仰、眼科を開業され信の道を一筋に歩まれた安波医師の、ガンで不治の宣告をうけられた御体験、又、盛岡で妙好人と呼ばれた清水凡禿居士の、信の旅姿の原稿を記載いたしました。

一道会の記は、最後になりましたが、榊原師の労を謝しております。年一度一堂に会して、黄色黄光、白色白光、青色青光の法味をうかがい、浄住寺に時ならぬ光りが輝いたかのように感じました。本年の私にもいのちあってお目にかかりたいものです。

木村無相さんは、四国の旅から富山、愛知岐阜の法友をたずね、一期一会の天衣無縫の姿を随所に現わされました。私はめずらしく、蓮如上人の御聞書から心に刻まれましたものを三つばかり誌しました。御叱声を願います。

御紹介

信仰の余瀝　近角常観著　〒一二〇円　六〇〇円

懺悔録　仝　上　〒一二〇円　三五〇円

信仰体験録　安波勲八著　一〇〇〇円　〒一六〇円

出版所　京都市左京区高野泉町四〇　文明堂。

振替　京都七七三四番

良書進呈

『無手の法悦』大石順教尼著　八五〇円

順教尼は、大阪堀江の六人斬りの唯一人の生存者。芸名、妻吉。后出家。

「私は両腕を無くしてコンナ仕合せだ。更に両足を無くしたらモツト幸福になれるだろう」と述懐された。

右御希望の方に無料贈呈して居られます。

申込先、

横浜市緑区美しが丘二—四三—二

長畑須賀男様

〈御案内〉

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜、午后一時半。　南区甚上町二の八八。花田宅。

市バス、新郊通り一丁目下車。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

名鉄、呼続下車

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午后。昭和区小桜町二丁目四番地

市バス、北山町、又は御器所通り下車。

○六月五日の日講は休みます。

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）

編集・発行人　名古屋市南区甚上町二ノ八八　花田正夫　電話八二一局七〇三七番

印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄

発行所　名古屋市南区甚上町二ノ八八　慈光社

振替口座　名古屋一〇四七〇番

郵便番号四五七

慈光　第二十九巻　第五号　昭和五十二年五月十五日発行（毎月一回十五日発行）

昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可